

破碎鏡と破鏡の時期的変遷とその認識

平尾 和久（伊都国歴史博物館）

I はじめに

糸島地域は弥生時代後期に入っても墳墓に銅鏡を副葬する地域である。三雲南小路遺跡・井原鎗溝遺跡には多くの完形鏡を副葬し、平原1号墓では攪乱内の銅鏡4面は不明ながらも、方格規矩鏡を中心とする36面の銅鏡が破碎された状態で出土している。しかし、このような棺外墓壙内における銅鏡の多数破碎例は乏しく、いままで例外的に扱われることが多かった。

そこで、本稿では、平原1号墓出土破碎鏡の性格解明の一助とするため、破鏡と破碎鏡の今日の状態を振り返りつつ、各地域における銅鏡の認識の変遷について検討していく。

II 完形鏡・破鏡・破碎鏡

用語については先学に従う。

完形鏡は完形のまま使用される銅鏡で、弥生時代では出土する地域が限定される。

破鏡は弥生時代後期～古墳時代前期の日本列島で特徴的にみられ、後漢鏡を主体とするものである。それらは一定期間破片の状態で使用され、破断面の研磨や穿孔が施されたものが多い(辻田2005a)。その中で研磨や穿孔が認められないものを鏡片として区別することがあるが(森岡2005)、本稿ではまとめて破鏡として取り扱い、

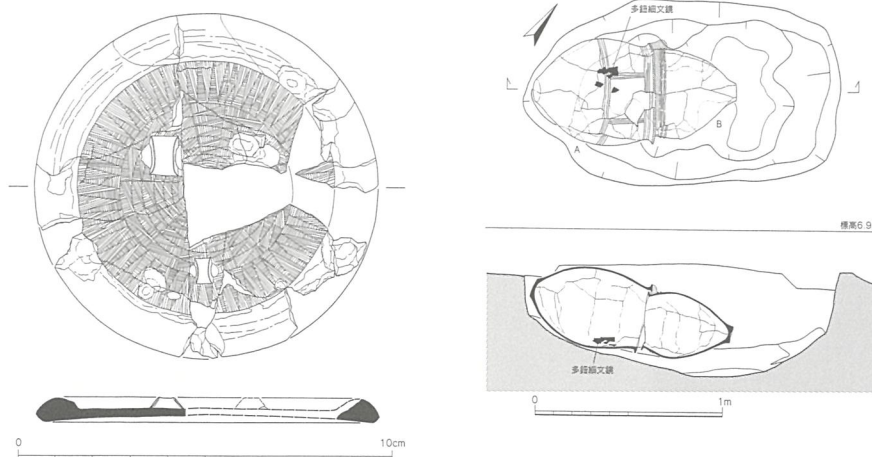
必要に応じて区分する。

破碎鏡は弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、葬送儀礼の中で銅鏡（完形鏡もしくは破鏡）を意図的に割り、副葬・破棄するものである(小山田1992)。なお、破碎鏡は銅鏡が使用された状態を示す用語であるため、不時発見のものや調査事例が古いものなどのように、確実には破碎鏡といえない例も存在する。本稿では基本的に銅鏡の出土状況等で破碎行為が確認されるものを対象とするが、必要に応じて境界付近にある資料も参考として用いることにする。

III 破碎鏡の展開

破碎鏡の風習は北部九州に始まる。増田遺跡6242号甕棺墓は弥生時代中期前半のもので、棺内から多鈕細文鏡が割れた状況で出土した(第1図 西田編2000)。この銅鏡が破碎鏡であるならば、銅鏡の破碎は空間の問題から棺内ではなく、甕棺の周辺、もしくは他の場所で行われたと考えられる。また、鏡自体も完形に復元できないことから、破片の持ち出しが行われた可能性もある。

なお、破碎鏡は弥生時代後期に至るまで増田例に継続する事例は現在のところ認められない。二塚山遺跡76号甕棺墓は弥生時代後期前半のもので、



第1図 増田遺跡6242号甕棺出土多鈕細文鏡（左）と甕棺出土状況実測図（右）（1/2・1/40）

壮年女性を被葬者とする（高島・七田編1979）。銅鏡は下甕口縁部粘土目張り中およびその直下、被葬者頭部左上から、破碎されて約10片に分かれた状態で出土した。鏡式は連弧文昭明鏡である。また、29号土墳墓でも粘土目張り中およびその直下、被葬者の頭部左上に破碎された状態の波文縁獣帯鏡が確認されている。いずれの銅鏡もほぼ完形に復元されるものの一部分欠損が認められるため、増田例と同様に棺の周辺で銅鏡の破碎行為を行い、鏡片を抜き取り、残りを目張り粘土の中などに入れたものと考えられる。

高津尾遺跡16区40号土墳墓では破鏡として用いられた3/4程度の大きさの方格規矩鏡を破碎し、胸部・腹部・足元に分けて副葬している（柴尾編1991）。時期は弥生時代後期後半～終末期。このような破鏡の破碎は高津尾例のほかに羽根戸南古墳群G3号墳（米倉編2001）や阿志岐B群24号墳（山野編1982）などのように古墳時代前期までみられる。

原田遺跡墓群Cの1号箱式石棺墓では、床面中央部に一段下がる小部屋を設け、破碎された単夔鏡（原田C鏡）と中央部から折られた鉄剣を納め、蓋として板石が置かれていた（福島編1987）。単夔鏡は十数片に割れており、外区の一部が欠けている（第2図）。また、原田遺跡墓群Aの石蓋土墳墓から出土した内行花文鏡（原田A鏡）の表裏には、穿孔が途中まで施された痕跡が残されている。

これらに前田山遺跡9号石棺墓出土の外区を一部欠く内行花文鏡（破断面を研磨する。長嶺編1987）を加えて破鏡製作の順序を検討した藤丸詔八郎氏は、一部が切り取られたように欠落する銅鏡は、完形の鏡の表裏から穿孔を施し、分割したものとした（藤丸1993）。

しかし、柳田康雄氏は原田A鏡のように意図的に貫通しない穿孔が多く見られるものを破碎鏡の一分類として捉えており（柳田2005）、見解が分かれるところであるが、前田山鏡の存在、また最近指摘された老司古墳3号石室出土三角縁神獸鏡片が、懸垂用の穿孔のほかに、外区を意図する大きさに整えるための穿孔痕を持つことから（辻田2005a）、基本的には鏡分割用の穿孔と捉えておきたい。

最近の調査事例として井原ヤリミゾ遺跡6号木棺墓がある（江崎・栢崎編2006）。墓壇の大部分が調査区外に伸びているが、幅2.8m×長さ1.02+αmを測る。棺は刳抜形木棺で、蓋をかぶせたあとに、ガラス小玉を撒いている。銅鏡は方格規矩鏡で、棺外墓壇内で破碎された状態で出土した。本例は弥生時代後期中頃に位置付けられる（第3図）。

平原1号墓は昭和40（1965）年に発見された墳丘墓で、東西13m、南北9.5mの範囲の一部を除き、幅2m前後の周溝が巡る。墓壇は墳丘の東北寄りに設けられ、東西4.6m、南北3.5mを測る。



第2図 前田山遺跡9号石棺墓出土鏡（左）と原田遺跡1号箱式石棺墓出土鏡（右）

棺は長さ3mの割竹形木棺で、直径は約1mと想定されている。棺内には朱が敷かれ、特に西側から多く検出されている。玉類の配置と考え合わせると被葬者は西枕で葬られたと考えられる。

副葬品は棺内と墓壙内から多く出土している。ここでは、銅鏡の出土状況を概観する。銅鏡は超大型内行花文鏡5面のほかに、内行花文鏡2面、方格規矩鏡32面、虺龍文鏡1面の総数40面確認され、墓壙の四隅と木棺中央部南側から出土している（A～E区）。そのうちA・B区は蜜柑植樹溝掘削時に攪乱を受けており（この植樹溝掘削が遺跡発見の発端となる）、遺物の出土状況等は明らかではない。しかし、A・B区から出土した超大型内行花文鏡2面と内行花文鏡2面は鏡片の欠損がほとんど無いことから、この4面については、完形鏡が副葬されていたとする考え方もある（柳田2000）。C・D区は方格規矩鏡を中心とする破碎された鏡が出土している。弥生時代後期になると銅鏡の複数面副葬が地域的に限られ、基本的に1面の銅鏡を破碎するが、平原1号墓では、完形副葬の可能性がある4面を除いた36面が破碎されており、この墳墓の特徴といえる^{註1}。

また、銅鏡の出土状況から破碎行為は人数的に限られた人々が墓壙を取り囲んで行ったものと想定できる。このことから筆者は平原1号墓の葬送儀礼では墓壙という狭い空間を取り囲み、少人数で銅鏡を破碎する儀礼とともに、広い場所で大勢の人々が力を合わせて行う大柱の樹立という、二

種類の重層的な儀礼が執り行われたと考えている（平尾2006）^{註2}。

IV 破鏡の様相

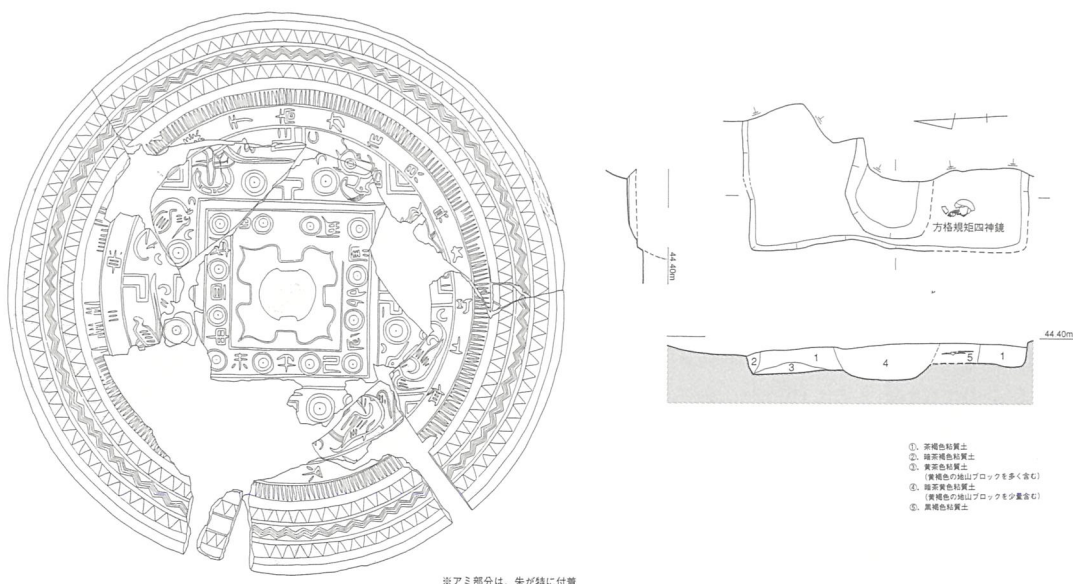
1. 北部九州の様相

破鏡は破碎鏡に比べ古くから認識されていたものである。破鏡という用語は梅原末治氏が用いたもので（梅原1952）、北部九州での鏡片副葬の認識は小田富士雄氏により示された（小田1959）。その後、調査事例の増加と共に①破鏡の出現、②破鏡の流通形態、③使用・廃棄のコンテキストという3つの問題意識（辻田2005a）のもとに研究が進められた（高倉1976・高橋1979・田崎1984・藤丸1993・森岡1994ほか）。以下、先学の研究成果に従いつつ、地域の様相をみていく。

破鏡は弥生時代後期からみられる。弥生時代後期～終末期にかけての分布の中心は北部九州にあり、各地域で異なる様相を示す。

福岡県内の破鏡は甕棺墓埋葬地域の周縁部に位置付けられる北九州・京築地域に分布の中心をもつ。この地域の破鏡は高島遺跡S1号石棺墓例（栗山編1987）や馬場山遺跡S5号石棺墓例（栗山編1980）のように墳墓から出土することが多い（藤丸1993）。墳墓以外の出土例としては、溝から出土した津留遺跡例（副島編1991）が認められるが、いずれも穿孔がないものが多い。

また、従来、完形鏡のみを副葬していた糸島地



第3図 井原ヤリミゾ遺跡6号木棺墓出土方格規矩鏡（左）と木棺墓実測図（右）（2/5・1/60）

域でも破鏡が見られるようになる。三雲遺跡イフ地区4号石棺墓の副葬品の可能性が高い内行花文鏡片（柳田・小池編1982）や井原ヤリミゾ遺跡1号木棺墓出土内行花文鏡片（江崎・檜崎編2006）など墳墓出土例とともに、御床松原遺跡100号住居跡例（井上編1983）のような集落出土例も認められるが、いずれも穿孔はない。

一方、大分県（豊後地域）でも大分市や大野川流域に分布する破鏡は、高松遺跡16・36号住居跡例（坂本編1988）や原遺跡3号住居跡例（後藤他編1982）のように集落からの出土が大部分を占め、穿孔を持つものが多い特徴がある。このように同じ破鏡でも地域によって使われ方が大きく異なることがわかる（藤丸1993）。

また、本丸遺跡例は扇形の外区片で、両端に穿孔を施す（小倉1985）。破鏡は石蓋土墳墓の床面、被葬者の胸元付近から出土し、伴出した勾玉・管玉とともに一連の首飾りとして被葬者に着装したものと考えられる。

古墳時代になると完形鏡の副葬が主流になるが（辻田2001）、北部九州では破鏡も見られる。羽根戸南古墳群G3号墓は古墳時代前期中頃の全長19.6mの前方後円墳である（米倉編2001）。その第一主体部である割竹形木棺から出土した内行花文鏡は1/2程度の大きさの破鏡の破断面を研磨し、2箇所穿孔を施した後に破砕するもので高津尾例と同様な破鏡の破砕事例である。なお、破砕された銅鏡はまとめて布にくるまれた状態で出土した。

また、古墳時代前期後半に位置付けられる野間10号墳から出土した神人獣形鏡は鈕座～外区まで残る1/4弱の破鏡である（賀川・小田1967）。この銅鏡は4つの孔をもつが、破鏡で穿孔を持つものは基本的に鈕を欠落したもので、藤崎遺跡例のように懸垂用の孔として用いられるため（濱石1991）、副葬される以前に割れた鏡片を結びつけるための穿孔とされる。本例は鈕を持つ破鏡で穿孔ももつ数少ない例とされるが、穿孔の目的が異なりひとくくりでは扱えない資料であろう。

逆に破鏡ではないが、花野谷1号墳から三角縁神獣鏡と共に出土した連弧文銘帯鏡（踏み返し鏡の可能性も指摘されている。森岡2005）は、完形鏡であるが、鈕が破損しているため、懸垂用の穿孔を施す例である（福井市教育委員会2000）。

したがって、鏡の穿孔は①懸垂用、②補修用と用途別に検討する必要がある、鈕を持つ破鏡には基本的に穿孔は施さない（辻田2005a）。

古墳時代前期からみられる三角縁神獣鏡は完形で副葬する鏡であるが、老司古墳では破鏡となった三角縁神獣鏡が出土した（山口他編1989）。それは外区縁部の鏡片で、面径の2/5を残し、復元径は22.9cmを測る。破断面側には5つの穿孔があり、いずれも研磨および手すれで滑らかになっている（高倉1989）。その後、辻田淳一郎氏による詳細な観察の結果、5つの孔は懸垂用のものであること。垂直に欠損する外区縁部は穿孔によって直線的に折り取られたことが明らかとなった。このため、北部九州という破鏡の発祥地では、破鏡の風習が長く引き継がれ、本来、完形鏡で用いるべき三角縁神獣鏡も破鏡として用いられたと解釈されている（辻田2005a）。しかし、破鏡の形態は様々あるものの（森岡1994）、銅鏡が多く破砕された平原1号墓例や、完形鏡が割れた状態で出土した安満宮山古墳1号鏡（鐘ヶ江編2000）のように、意図的でなくとも銅鏡が割れた場合、外区が扇形に残ることが多く、この形が破鏡の一形態として認識されていたことで、不定形の鏡片も老司古墳例のように扇形に形を整えたとも考えられる。

2. 瀬戸内以東の様相

北部九州以外の状況はどうであろうか。破鏡と破砕鏡を合わせてみていこう。

弥生時代の破鏡は北部九州に分布の中心を持つが、一部は瀬戸内以東まで広がる。その時期は一部弥生時代後期前半にさかのぼる例も報告されているが、大半は弥生時代終末期～古墳時代前期が中心で、事例も北部九州と比べ少ない。

中国・四国地方では大きく①山陰地域、②瀬戸内地域、③四国太平洋沿岸地域の3箇所に分布する。

山陰地域では妻木晩田遺跡松尾山地区45号住居跡、妻木山地区119号住居跡、松尾城地区11号住居跡から鏡片が出土している（松本他編2000）。時期はいずれも弥生時代後期後半である。中・四国地域の鏡片を検討した君嶋俊行氏は集住度が突出して高い集落、または交易の拠点とされる遺跡からの出土が多く、破鏡を入手しえた集団

の優位性を認めている（君嶋2006）。

そのほか、青木遺跡60号住居跡（鳥取県教育委員会1978）や青谷上寺地遺跡からも鏡片が出土しているが、いずれも集落から出土する。

瀬戸内地域では、弥生時代中期後半～後期前半の包含層から出土したとされる文京遺跡10次調査例を除き（宮本編1991）、弥生時代後期後半から破鏡がみられる。文京遺跡24次調査や庄・蔵本遺跡からは、弥生時代終末期～古墳時代初頭の集落内の包含層から鏡片が出土している（中村編2005）。なお、両者はいずれも穿孔が施されている。

墳墓からの出土例は、集落出土例よりも若干、後出する。鶴尾神社4号墳は弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置付けられるが（渡部編1983）、この古墳から出土した方格規矩鏡は完形のものが約1/2ずつ二つに割れており、お互いをつなぎ合わせるための補修孔が施されている（梅原1933）。この鏡の副葬状況は盗掘の影響で明らかではないが、補修孔をもつ鏡の破碎例の可能性はある。

また、古墳時代初頭に位置付けられる朝日谷2号墳の2面の銅鏡は完形のものを二つに分割して副葬している（梅木編1998）。このあたりは古墳時代前期の完形鏡副葬システムが確立される以前の副葬形態として注目される。

一方、破鏡を副葬する場合も多い。相の谷9号墓主体部の箱式石棺からは2孔をもつ破鏡が出土している（正岡1973）。また、一国山3号墳主体部の箱式石棺には破断面が滑らかな破鏡が副葬されており、一定期間の破鏡の使用が認められる（河田編2006）。石鎚山2号墳では第1主体部である組合式木棺北側小口隅で2孔をもつ約1/2の破鏡が破碎されていた（広島県教育委員会1981）。この例は、先述した羽根戸南古墳群例とよく似た副葬状態である。

四国太平洋沿岸地域では、類例が少ないながらも弥生時代後期前半～中頃から破鏡の出土が確認される^{註3}。田村遺跡は弥生時代前期から継続する大規模な集落遺跡であるが（出原他編1986）、弥生時代後期～終末期にかけての住居跡や自然流路、または水溜り状の遺構と考えられる遺構から方格規矩鏡の破鏡が出土している。このことは、山陰地域・瀬戸内地域と共通する点であるが、古墳時代初頭～前期の出土例はほとんどない。また、

墳墓からの出土例も確認されていない。

近畿では弥生時代後期前半から破鏡が見られる。滝ヶ峯遺跡は高地性集落であるが（森1972）、その西端で確認された空堀状遺構から虺龍文鏡片が出土している^{註4}。

播磨大中遺跡7-A号住居跡は弥生時代後期後半のベッド状遺構をもつ住居跡であるが（山本1990）、床面近くから破断面が摩滅し2孔をもつ内行花文鏡が出土した。このように、滝ヶ峯遺跡例を除くと、吉田南遺跡や芥川遺跡例のように大部分が弥生時代後期後半以降の集落からの出土である。また、瓜破北遺跡の弥生時代後期の遺物包含層からは異体字銘帯鏡片が出土している（京嶋1981）^{註5}。

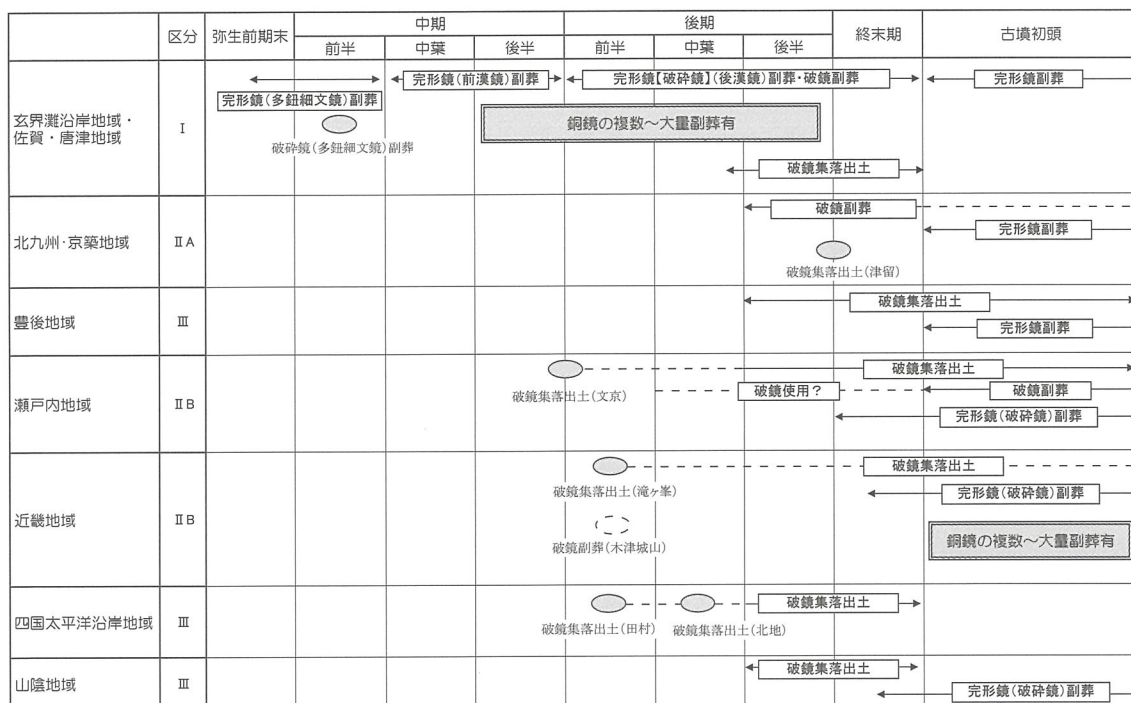
例外として木津城山遺跡方形台状墓2の周辺埋葬施設SX09から獣帯鏡片が出土している。調査担当者はその時期を弥生時代後期前半とする（伊賀編1998）^{註6}。

しかし、弥生時代終末期からは墳墓への副葬例が増加する。ホケノ山墳丘墓は全長約80mの前方後円形の墳丘墓で、主体部は石積木槨である。棺は割竹形木棺で、画文帯神獸鏡が1面副葬される。棺外からは内行花文鏡片など23点の銅鏡片が確認された。これらは、少量の出土でありながら接合する破片が多いことから、副葬段階で鏡片であったものが、さらに割れた可能性が指摘されている。また、出土状況から、これらの鏡片は石積木槨の上で破碎された状態でばら撒かれた可能性もある（檀原考古学研究所編2001）。

また、黒田墳丘墓は全長52mの前方後円形の墳丘墓で、双頭龍文鏡が木棺内外から破碎された状態で出土した（園部町教育委員会1991）。

弥生時代終末期～古墳時代前期にかけては東山古墳（仁保1992）や寺ノ段2号墳などの墳墓や池島・福万寺遺跡などの集落で、破鏡が一斉に副葬・廃棄されていく（辻田2001）。

古墳時代前期になると古墳へ副葬される銅鏡は完形鏡が主体となるが、一部で銅鏡の破碎が行われる。愛宕神社1号墳は4世紀後半に築かれた方墳で斜縁四獣鏡が出土した（竹井編1998）。主体部は長大な組合式木棺で、内部を北副室－主室－南副室の3つに区分する。銅鏡は被葬者の足元付近、つまり主室南東隅で破碎され、鏡片を積み重ねて仕切り板に立てかけられていた。本例は古



第4図 完形鏡・破碎鏡・破鏡の時期的変遷図

墳時代の破碎鏡の事例であるとともに、銅鏡を被葬者の足元に副葬する数少ない事例でもある。

また、桜井茶臼山古墳では倭鏡の破鏡の存在が指摘されているが(今尾1993)、倭鏡の破鏡は類例に乏しい。

近畿以東では愛知県高蔵遺跡で弥生時代後期前半の住居跡から破鏡が出土している。鏡式は虺龍文鏡で滝ヶ峯遺跡例と共通する。それ以外では弥生時代後期後半～終末期が初現期である。また、破鏡の分布には地域的な粗密の差があり、石川県金沢市周辺では無量寺B遺跡(出越編1984)、古府クルビ遺跡(橋本編1976)、吉崎・次場遺跡(福島編1984)などで破鏡が出土し、一大密集地となっている(林2005)。

また、高部古墳群では破鏡・破碎鏡が見られる(小沢1998)。

古墳時代前期になると山形県の馬洗場B遺跡にまで破鏡が及ぶ事が確認されている(高橋2003)。なお、瀬戸内以東への破鏡・破碎鏡の広がり、小形仿製鏡の展開とも関連が認められる。近畿地域出土の北部九州製小形仿製鏡は10面ほど出土しているが、いずれも弥生時代後期後半以降の遺構から出土している(高倉1985)。

また、近畿製の小形仿製鏡は鈕と鈕孔が大きいという特徴があり(田尻2005)、最も古い例として青谷遺跡表採品が挙げられ、その文様から弥生時代後期前半に位置付けられている(森岡2005)。そしてこのモデルとなる小型の前漢鏡が後期初頭に持ち込まれたと想定されている(森岡1993)。

しかし、現段階では近畿で弥生時代後期初頭以前の遺構から前漢鏡が出土した事例はほとんど無く、時期が特定できる遺構からの出土が待たれる。さらに加えると、近畿では銅鏡の使われ方が北部九州とは異なるため、銅鏡自身の入手経路も異なる可能性もある。

今まで述べてきた各地域の破碎鏡・破鏡の時期的変遷をまとめたものが第4図である^{註7}。

V 分析

以上、破碎鏡と破鏡の概要を見てきたが以下で若干の分析を行う。

1. 破碎鏡について

銅鏡の破碎は、現在のところ、弥生時代中期前半からはじまる(増田遺跡6242号甕棺墓)。し

かし増田例は、後続する破碎事例が後期前半まで見られないことや報告書の記載などからも破碎鏡とは断言できない^{註8}。しかし、本例が破碎鏡だとすると、前述したとおり、ある場所（甕棺墓の近くかどうかは不明）で破碎したものを甕棺の中に納めたものといえる。

弥生時代中期には銅鏡の破碎が認められず、完形鏡を副葬する時期といえる。しかし、銅鏡を所有できる層は限られており、銅鏡の分布も限定的であった。

弥生時代後期前半になると破碎鏡が認められる。二塚山遺跡76号甕棺墓では甕棺口縁目張り粘土下から破碎された異体字銘帯鏡が出土した。本例が破碎鏡の棺外副葬の初現で、以後、棺内副葬と併行しながら棺外副葬が定着していく。

また、弥生時代後期前半以降、甕棺墓から木棺墓・石棺墓へと墓制の変化が認められるが、銅鏡の破碎は継続される。なお、甕棺墓で銅鏡の破碎が行われる場合は、下甕に被葬者を埋葬し、上甕で蓋をした後に銅鏡の破碎を行うことが多く、その場所としては甕棺の合口部に集中する（良積遺跡14号甕棺墓など）。

弥生時代後期後半～終末期に築かれた高津尾遺跡16区40号墓では、3/4程度の方格規矩鏡を破碎する。このような破鏡の破碎の事例は少ないが、古墳時代前期まで継続してみられる。

また、墓壙中で鏡の破碎を行う井原ヤリミゾ遺跡6号木棺墓例は木棺を据え、ある程度埋めたところで銅鏡を破碎するという平原1号墓との共通点もあり、時期的な関係から平原1号墓でみられる銅鏡破碎の祖形的な事例として認められる可能性がある。しかし、例えば銅鏡を10面以上破碎するような、直接的系譜関係をもつ墳墓は未だ確認されていない。したがって、現段階では銅鏡を1面破碎する葬送儀礼から飛躍的に複雑化したものが平原1号墓の銅鏡破碎といえるだろう。また、仮に井原ヤリミゾ遺跡6号木棺墓における銅鏡の破碎が平原1号墓の祖形といえるならば、糸島地域という狭い範囲の中で銅鏡を用いる葬送儀礼が短期間で重層化したことになる。

従来、弥生時代において、ひとつの墳墓に複数面の破碎鏡が認められるのは平原1号墓のみであったが、近年調査された中原遺跡13415号方形周溝墓で2面の破碎鏡が出土し、注目される^{註9}。

瀬戸内以東でも弥生時代終末期以降、銅鏡の破碎行為が認められるが、弥生時代終末期のホケノ山墳丘墓や黒田墳丘墓の破碎事例の系譜が北部九州・瀬戸内のどちらに繋がるものなのか検討する必要があるだろう。

さて、平原1号墓で見られるような銅鏡の破碎行為は、その規模を縮小しながらも大型前方後円墳出現前後まで認められる（今尾1993）。また、北部九州では羽根戸南古墳群G3号墳や老司古墳など古墳時代前期にも継承されるが、古墳時代に入ると基本的に完形鏡を副葬するようになり、破碎鏡や破鏡の副葬は減少していく。

いうなれば、弥生時代後期後半～終末期にかけて完成もしくは最高潮を向かえた平原1号墓を頂点とした銅鏡を破碎する葬送儀礼は、古墳時代の墳墓祭祀の主流とはならなかったのである。しかしながら、平原1号墓で出土した超大型鏡の生産・副葬は古墳時代前期まで継承されるなど、破碎鏡を用いた葬送儀礼とは大きな違いを見せる^{註10}。

2. 鏡の認識の時期的変遷

破鏡の生成には、様々な理由が挙げられている。例えば鏡片の輸入（森1985・高橋1979）や破碎鏡からの破片の取り出し、破片の切り取り（藤丸1993）など諸説あるが、未だ確定していない。鏡片の輸入の場合、原の辻遺跡に馬車の車軸頭等の中国製の青銅器が持ち込まれているので、可能性が無いとはいえないものの、中国には様々な青銅器がある中で、銅鏡の破片だけが選択されて大量に持ち込まれるとは少し考えにくい。

また、仮に鏡片の輸入が行われたとしたら、大陸に最も近い対馬で小形仿製鏡や広形銅矛が出土しながら、破鏡が全く認められないことは不自然であろう。一方、後者の場合も、接合例がほとんどない現状であるが、前田山遺跡や原田遺跡の事例から、可能性としては前者よりも高いといえる。

また、先述したように破鏡は豊前地域においては基本的に墳墓の副葬品として使われ、一方、豊後地域では集落から出土し、穿孔を持つものが多いなど、地域によって使われ方が異なり、その分布も明瞭に分かれる（藤丸1993）。このことは、人々の銅鏡に対する認識の差を示していると考えられる。以下でその変遷と地域性をたどってみよう。

北部九州では弥生時代前期末～中期前半にかけて、朝鮮半島製の多鈕細文鏡が認められる。国内で11遺跡12面出土しているが、そのうち8面が北部九州から出土し、甕に入れて埋納されていた若山遺跡例を除くほとんどが副葬品として扱われ、1面ずつ納められている。現在のところ、破碎鏡の可能性が指摘されるものは、増田遺跡例のみで、この時代は完形鏡の時代といえるが、今後、朝鮮半島の事例とともに破碎の有無の確認が必要となるだろう。

弥生時代中期後半になると、紀元前108年に朝鮮半島西北部に設置された楽浪郡を経由して持ち込まれた前漢鏡が見られるようになる。しかし、分布は山口を含む北部九州に限られる。しかも、後の伊都国・奴国の拠点となる遺跡で銅鏡が集中して副葬される。例えば、三雲南小路遺跡1号甕棺の副葬品を見てみると武器形青銅器やガラス製玉類やガラス璧、金銅四葉座飾金具のほか前漢鏡約35面が認められる（柳田編1985）。甕棺の大部分が破壊され、詳細は不明ながらも、記録や拓本、博多の聖福寺に納められている銅鏡から、これらの銅鏡は本来、完形で副葬されたと考えられる。須玖岡本遺跡でも同様に約30面の銅鏡が副葬されている（春日市教育委員会編1994）。また、立岩堀田遺跡10号甕棺では、6面の前漢鏡が出土しているが、被葬者の左右それぞれに3面ずつ配置している（立岩遺跡調査委員会編1977）。これら3遺跡以外では銅鏡はほとんど副葬されず、銅鏡が認められる場合でも1・2面のものが大半となる。これらはいずれも完形鏡で、前代に引き続き銅鏡を完形で用いる時代といえる。したがって、先述したように近畿地域で異体字銘帯鏡の鏡片が包含層から出土する例が認められるが、いずれも小片であるため、後の時代に持ち込まれたものと判断する。

また、北部九州では銅鏡の多量副葬など独自のシステムで階層を明示しており、本来、化粧道具として用いられた中国とは銅鏡に対する思いや位置付けも異なるものと考えられる。ただ、この時代は基本的に完形鏡を用いるため、鏡背文様に含まれる意味を理解することも可能であったと判断しておきたい。

弥生時代後期になると銅鏡の分布は前段階に比べると大きく広がるが（特に後半段階）、銅鏡そ

のものは完形で用いられることが激減し、葬送儀礼の中で完形鏡（破鏡）が破碎されたり、破鏡が副葬されるようになる。破碎鏡・破鏡の時代の到来である。

銅鏡を破碎したり、破鏡が作られる理由として、需要の増加に対して、中国内部の情勢悪化のために供給量が減少したことによるという解釈があるが（田崎1984他）、実際のところはよく分からないのが実情である。

また、先述したように破鏡の分布には特色があり、用途も地域で異なると指摘されているが、その分布を見ていくといくつかに分類できる。

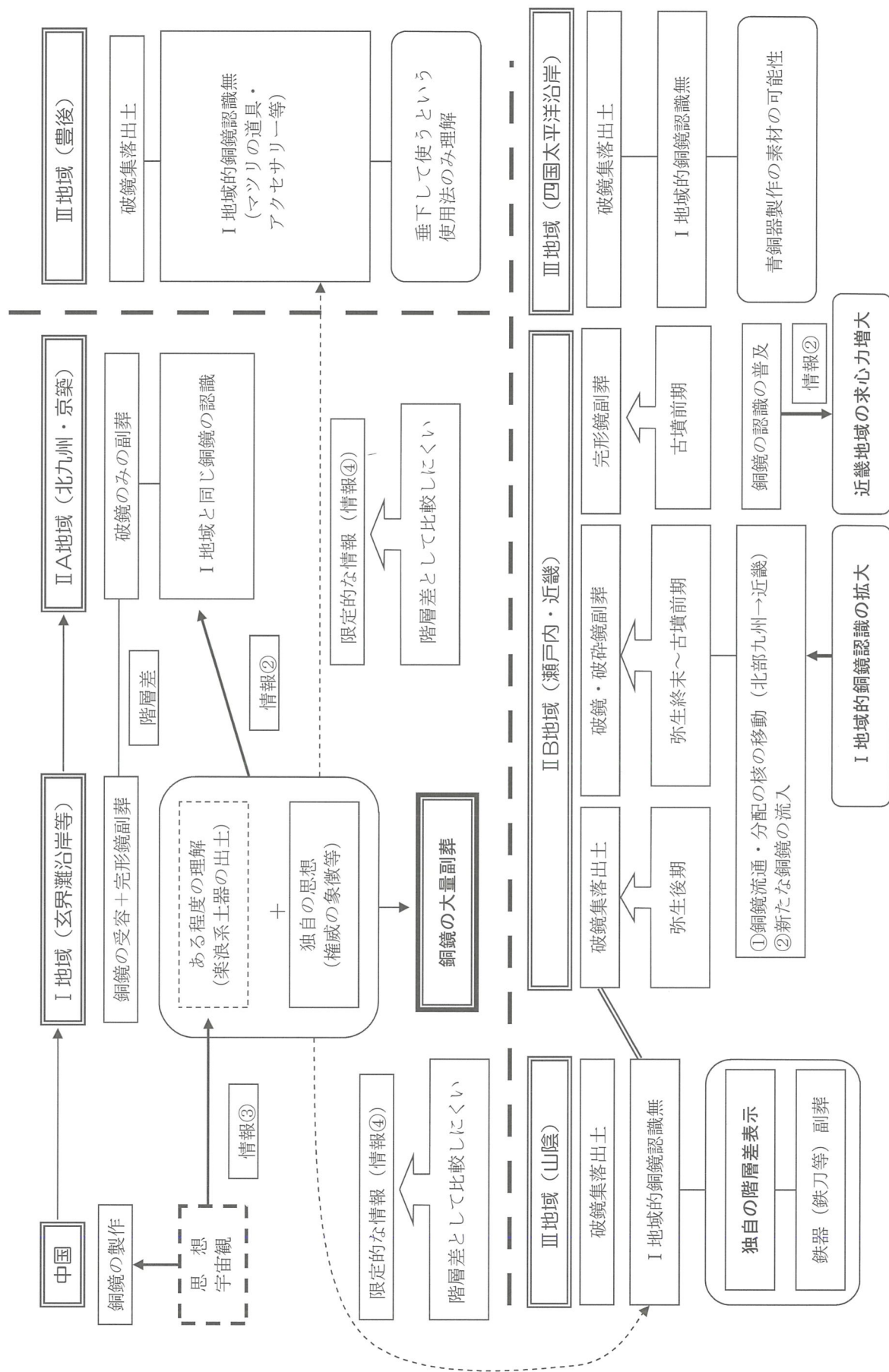
まず、弥生時代後期にも完形鏡を副葬し、破鏡も副葬品として扱われる場合が多い地域である。地域的には玄界灘沿岸（糸島・福岡）・佐賀・唐津地域が該当する（Ⅰ地域）。

次に完形鏡の副葬がほとんど見られないが破鏡を墳墓に納める地域である（Ⅱ地域）。地域的には北九州や京築などの豊前地域が該当する（ⅡA地域）。時期的には後出するが、弥生時代終末期～古墳時代初頭になると瀬戸内・近畿地域も破鏡を墳墓に納めることから、ⅡB地域として区分する。

3番目は完形鏡の副葬が認められず、破鏡も住居や溝など墳墓以外から出土する地域である。地域的には豊後地域・四国太平洋沿岸地域・山陰地域が該当する（Ⅲ地域）。

Ⅰ～Ⅲ地域における銅鏡の性格を見てみよう。Ⅰ地域は基本的に前代から完形鏡の副葬を継続する地域である。加えて、数を減少させながらも弥生時代後期まで完形鏡を副葬する地域であることから、完形鏡を保有する層、破鏡を保有する層、銅鏡を持ってない層それぞれの関係は階層差を示すといえる。また、地域内に完形鏡が存在し、銅鏡の有無や完形と破片の違いが階層差を示すとするならば、銅鏡の背に鋳出された文様の意味なども、完形鏡をもつ層のみならず破鏡だけをもつ層、銅鏡に触れることすら許されない層の人々にまで、ある程度理解が浸透していたと考えられる。

ⅡA地域の豊前地域では基本的に破鏡のみが出土する。その出土傾向はすでに指摘されているように、墳墓からの出土が大半で、集落からの出土は津留遺跡など少数にとどまる。なかには本丸遺跡のように管玉や勾玉とともにネックレスとして用いられることもある。この地域は弥生時代中期



第5図 西日本における銅鏡の認識模式図

～後期にかけて完形鏡の出土がほとんどなく、後期後半～終末期に破鏡が副葬されることから、Ⅰ地域のように鏡背の意味まで理解したのか不明な点はあるが、前田山遺跡のように銅鏡の折り取り事例の存在や銅鏡は墳墓に納めるというⅠ地域の基本的なルールは守られていることから、完形鏡－破鏡という階層差を理解しながらも完形鏡を入手できなかった地域といえる。

Ⅲ地域は集落から破鏡が出土する地域で、穿孔をもつものが多い。この地域では、小型鏡は吊り下げて使うという日常的な使用法は共通しながらも、銅鏡は最終的に墳墓に納めるというルールは理解されていない。

また、銅鏡から破鏡を取り出す方法として銅鏡破碎後の鏡片取り出しや完形鏡からの折り取りが想定されるが、現在のところ、豊後地域では認められず、他地域から鏡片が持ち込まれたと考えるのが自然であろう^{註11}。したがって、鏡片の受け入れ側は銅鏡の全体像やその意味などは知る由も無かったものとする。

山陰地域^{註12}や四国太平洋沿岸地域^{註13}にも鏡片で持ち込まれたと考えられ、大きく捉えるならば豊後地域と同じような銅鏡の認識といえるだろう。

ⅡB地域とした瀬戸内地域、とくに四国瀬戸内側では弥生後期後半段階では集落からの鏡片出土が散見される。しかし、弥生時代終末期～古墳時代初頭になると瀬戸内地域で一斉に破鏡が墳墓に副葬される。これは、辻田氏が指摘するように弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけて新たに大陸からの銅鏡の流入が想定されるとともに、墳墓への銅鏡副葬、つまり北部九州的な銅鏡の使用法が東方に拡大したものと考えられる。

古墳時代前期になると多くの研究者が指摘するように、完形鏡副葬の時代となり、銅鏡の分布などから銅鏡流通・分配の核が北部九州から近畿へと完全に移行したといえる（辻田2001）。

VI まとめ

本稿では、破碎鏡・破鏡の出土形態と出土する遺構の違いから銅鏡に込められた意味と弥生時代の人々の関係について検討を行った。

近年、弥生時代終末期～古墳時代前期に神仙思想が取り入れられて云々・・・という議論が盛んであるが、これらは基本的に完形鏡の鏡背を見な

いと理解できないものであり、その前段階の銅鏡の認識はどのようなものであったのかという素朴な疑問が本稿をまとめる契機となった。

結果として、中国で鑄造された時に鏡背の文様に込められた思いや宇宙観が、北部九州に持ち込まれた段階でも共通するものかどうかは不明であるが、本稿のⅠ地域やⅡA地域では銅鏡に対するある一定の共通した認識が存在したと考えられ、同じ銅鏡でも集落でのみ破鏡が出土するⅢ地域とでは、銅鏡に対する認識が全く異なっていた可能性を指摘した。

また、ⅡB地域は当初、集落からの出土のみであったが、弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけて墳墓の副葬品として銅鏡が用いられ始める。これは前述したように銅鏡の流通・分配の核の移動に伴うものと考えられており、瀬戸内海を介して銅鏡副葬の風習が東方に伝えられたのであろう。このことは、さまざまな搬入ルートが想定される鉄器や鉄素材とは全く異なる点である。

なお、本稿では銅鏡の使用形態の違いが銅鏡に対する認識の違いであると指摘したが、鉄の加工技術やガラス玉の製作技術などの情報は、愛媛県文京遺跡などの大型拠点集落に伝わっている。そこには北部九州との頻繁な交流が想定され、さまざまな情報も伝わったものと考えられる。しかし、すべての情報が同じように流れるわけではなく、例えば

- 情報① 自然と伝わっていく情報
- 情報② 積極的に外に出していく情報
- 情報③ 要望があれば提供する情報
- 情報④ 外に出さない情報

などのように情報のあつかいはそれぞれ異なる。

本稿で検討した銅鏡を通じて考えてみると、中国で銅鏡の製作時に込められた思想や宇宙観は、楽浪系土器の存在などからⅠ地域ではある程度理解されていたと考えられる（中国・楽浪郡からの情報③）。Ⅰ地域ではこれに加えて、銅鏡の保有を権威の象徴とするなど、独自の思想を付加した結果、弥生時代中期後半には銅鏡の大量副葬が見られるようになる（三雲南小路遺跡・須玖岡本遺跡）。ⅡA地域は破鏡のみであるが銅鏡を副葬することから、Ⅰ地域と同様な銅鏡に対する認識であったといえる（Ⅰ地域からの情報②）。つまり、Ⅰ地域・ⅡA地域では完形鏡－破鏡副葬の差は階

層差といえる。

しかし、銅鏡の墳墓副葬は北部九州以外では弥生時代終末期までほとんど認められないことから、銅鏡の最終的な使用法、つまり葬送儀礼に伴う銅鏡の使用法は外に出さない情報のひとつになっていた可能性がある（情報④）^{註14}。

ただ、Ⅲ地域では、集落出土でありながらも、破鏡に穿孔を施したり、鈕を伴う破鏡には穿孔を施さない特徴を持つことから、小型の銅鏡は吊り下げて用いるという銅鏡の日常的な使用法は理解されていたと考えられる（辻田2005a）。

当初、Ⅲ地域と同様な銅鏡の出土傾向を示していたⅡB地域は、弥生時代終末期～古墳時代初頭になると破砕鏡・破鏡を墳墓に副葬するようになる。その原因として、北部九州から近畿への銅鏡流通・分配の核の移動や、新たな銅鏡の流入が考えられ（辻田2001）、その結果、Ⅰ地域（ⅡA地域）でみられた銅鏡の認識がⅡB地域まで拡大したのである。

古墳時代がはじまるとⅡB地域（特に近畿）は弥生時代のⅠ地域とは異なり、銅鏡の価値や意義を広く西日本全域に知らしめることで（ⅡB地域からの情報②）、従来、銅鏡を受容していなかった地域にも、銅鏡の認識が広まり、より一層近畿の求心力・権威が高まったと考えられる。

つまり、この銅鏡認識に関する情報の取り扱いの差こそ、弥生時代の北部九州と古墳時代の近畿の最も大きな差であったといえる。なお、この段階で、銅鏡には弥生時代のⅠ地域的銅鏡認識に、古墳時代前期のⅡB地域的銅鏡認識が加味されたと考えられる。

上で述べた関係を模式図的に示したものが第5図である。

このように、弥生時代における銅鏡の認識や用い方は地域によって大きな差があることが明らかとなったが、これらの比較・検討やその解釈、また銅鏡以外に認識の差を持つ遺物の確認などが今後の課題となるだろう。

本稿は平成18年度秋季特別展『大鏡が映した世界』の図録の原稿を執筆する際に気になったところをまとめたものである。また、本稿の内容は第13回福岡大学金属器談話会で発表した内容の一部を含んでいる。

しかしながら、本稿では各地域の破鏡の取り扱いが雑駁なところもあり、今後、資料調査の継続を考えている。先学諸賢のご叱正を請う次第である。

なお、本稿の執筆にあたり、下記の方々にご教示を受けた。記して感謝申し上げます。

小田富士雄・小松 譲・武末純一・田尻義了・辻田淳一郎・寺沢 薫・西谷 正・藤丸詔一郎・村上久和・桃崎祐輔（敬称略 五十音順）

（註）

1. 平原1号墓出土鏡には、ほぼ完形に復元される一群と、欠損部分が多い一群があるが、後者の欠損部分の行方の確認とその意義付けが課題である。

2. 筆者は鏡の破砕には、被葬者の後継者や集落の有力者などが参加したと考える。反対に大柱の樹立には、被葬者（王）を慕う一般の人々が参加したと考える。

3. 北地遺跡の隅丸方形の住居跡から破鏡が出土している。住居跡出土の土器から弥生時代後期中頃とされる（出原2004）。また、田村遺跡群2次E1区102号住居跡からも破鏡が出土し、弥生時代後期前半に位置付けられる（小野他編2004）。

4. 滝ヶ峯例の存在は「Ⅳ期末～Ⅴ期初頭の弥生土器にみられる瀬戸内地方との広域交流に乗じた現象」という解釈もある（森岡1993）。

5. これら異体字銘帯鏡の出土から弥生時代中期後半～後期初頭の段階に前漢鏡の流入を指摘する意見もあるが（森岡1993）、この段階に銅鏡として流入したならば、完形に近い形で存在すると考えられるため、これら小片の場合は、より新しい時期に流入したものと考える。

6. 出土状況は概報によると「（方形台状墓2の）方台部西寄りのSX08・09については、検出面が西に向かって次第に傾斜していることもあって、依存状態は良好とは言えないが、墓壇はともに長方形プランで、長さ3.0m前後・幅1.0m前後の規模を有する。両者とも完掘していないが、その西半部を南北方向に貫く墓壇より新しい溝（SD15）の掘削に伴い、その下縁が一部墓壇底（棺底）に達し、SX09と重複する部分で獣帯鏡破片が1点出土した。」とあり、検出状況の図等は掲載されていない（伊賀編1998）。調査担当者はSX09に伴うものと判断されているが、近畿では破鏡を伴う弥生時代の墓はほかに認められず、概報を読む限りSD15出土の可能性も否定できないため、資料

の取扱いが難しい。報告書の段階で遺構図や土層断面図が掲載されることを期待したい。

7. この変遷図は以前、発表で提示した際、田尻義了氏より、①小形仿製鏡との比較が必要ではないか、②玄界灘沿岸・佐賀・唐津地域という地域区分はもう少し細かく区分できるのではとの指摘を受けた。

②については同じ完形鏡を副葬するI地域のなかでも、1面のみ副葬する地域、多量に副葬する地域などのように小地域区分が可能であるが、本稿では、西日本全域における銅鏡の認識の違いを検討するために比較的大きな地域区分としている。また、①については本稿では若干ふれるのみで、大きく反映することができなかった。今後の課題としておきたい。

8. 報告書には「鏡は細かく割れ、ほとんどが鏡面を上に向けた状態でA棺底の直上より出土した。棺内には陥没による崩落土が充満していたが、鏡片は散在しており（流入土により割れたとしたら）やや不自然な出土状況である。さらに出土した鏡は完形ではなかったため、遺体の傍らに割れた（故意に割られた？）状態で副葬された可能性がある。ただし鏡片が調査時に失われた可能性もあり、埋没していく過程で割れてしまったことも否定できない。」とある。また、本例が破碎鏡だとしても、多鈕細文鏡と漢鏡ではその意味合いが異なるものとする。また、多鈕細文鏡の破碎については、朝鮮半島における事例の有無の確認も必要である。

9. 中原遺跡については、小松譲氏にご教示を得た。また、遺跡の概要は第8回七隈史学会で発表されている。本稿では中原遺跡で破碎鏡が複数面出土したことのみ記し、その性格等については報告書の刊行後検討してみたい。

10. 葬送儀礼の中で、完形で用いる鏡、破碎する鏡が区別され（小山田2005）、古墳時代になると前者が後者を圧倒していったのであろう。また、弥生時代後期の小形仿製鏡から古墳時代の倭鏡へといった銅鏡の製作技術の飛躍的向上（継続性の有無は別として）も大きな変化点である。

11. 豊後地域の場合は墳墓の調査例がほとんど無いことも原因と考えられる。藤丸詔八郎氏ご教示。

12. 山陰地域では銅鏡ではなく、墳墓に納められた鉄刀などの鉄器の有無等で階層差を表現した可能性がある（野島2005他）。

13. 四国太平洋沿岸地域、特に西分増井遺跡では、破鏡だけでなく中広銅矛・広形銅戈などの武器形祭器や

銅鐸の破片も出土しており、青銅器生産のための素材として持ち込まれた可能性が指摘されている（出原2004）。しかし、現在のところ鑄型や取瓶は出土しておらず実態は不明であるが、実際に青銅器生産のための素材として破鏡（鏡片）が取り扱われたのならば、北部九州との交流が存在するこの地域でも、北部九州的な銅鏡の認識は無いものと考えられる。

14. 辻田氏は瀬戸内地域の破鏡の展開について、弥生時代後期に未穿孔破鏡が集落に廃棄され、古墳時代に穿孔を有する破鏡が多く副葬されることを指摘した。このことから、弥生時代の祭祀で継続的に用いていた破鏡が、完形鏡の流入とともに副葬されるようになったと判断している（辻田2005a）。

【参考文献】

- 伊賀高弘編 1998「木津城山遺跡」『京都府遺跡調査概報』85（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
伊都国歴史博物館 2006『大鏡が映した世界』伊都国歴史博物館図録3
井上裕弘編 1983『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集
今尾文昭 1993「古墳と鏡」『季刊考古学』43 雄山閣出版
岩永省三 1998「青銅器祭祀の終焉」『日本の信仰遺跡』雄山閣出版
上野祥史 2004「韓半島南部出土鏡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』110
梅木謙一編 1998『朝日谷2号墳』松山市文化財調査報告書第63集
梅原末治 1933「讃岐高松石清尾山石塚の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第12冊
梅原末治 1952「岡山縣下の古墳発見の古鏡」『古備考古』85
江崎靖隆・檜崎直子編 2006『三雲・井原遺跡』前原市文化財調査報告書第92集
小倉正五 1985「宇佐市本丸遺跡出土の副葬品」『えとのす』
小沢洋 1998「千葉県高部30号墳・32号墳」『季刊考古学』65 雄山閣出版
小田富士雄 1959「豊前京都郡発見の三重墓」『古代学研究』20
小野由香・出原恵三・名木郁・前田光雄・宮地啓介・吉成承三編 2004『田村遺跡群Ⅱ 第3分冊 D・E区の調査』高知県埋蔵文化財センター発掘調査

報告書85

賀川光夫 1992「再生鏡の分配と弥生後期の社会」『史学論叢』22

賀川光夫・小田富士雄 1967「野間古墳群緊急発掘調査」『大分県文化財調査報告』第13輯

春日市教育委員会編 1994『奴国の首都 須玖岡本遺跡』吉川弘文館

鐘ヶ江一朗編 2000『安満宮山古墳』高槻市文化財調査報告書第21冊

河田健司編 2006『南坂8号墳 一国山城跡 一国山古墳群』岡山市教育委員会

君嶋俊行 2006「妻木晩田遺跡出土の破鏡について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2005』

京嶋覚 1981「瓜破北遺跡出土の前漢鏡片」『考古学雑誌』67-2

栗山伸司編 1980『馬場山遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第36集

栗山伸司編 1987『高島遺跡調査概報』北九州市文化財調査報告書第45集

後藤一重他編 1982「原遺跡」『大分県内遺跡詳細分布調査概報』大分県教育委員会

小山田宏一 1992「破砕鏡と鏡背重視の鏡」『弥生文化博物館研究報告』1

小山田宏一 2005「紀年銘鏡と古墳」『季刊考古学』90 雄山閣出版

坂本嘉弘編 1988『大分県大野郡犬飼町大寒所在遺跡の調査報告書』犬飼町教育委員会

柴尾俊介編 1991『高津尾遺跡4』北九州市埋蔵文化財調査報告書第102集

仁保晋作 1992「阿山町東山古墳の遺構と遺物」『研究紀要』1 三重県埋蔵文化財センター

副島邦弘編 1991『津留遺跡』行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集 福岡県教育委員会

園部町教育委員会 1991『船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』園部町文化財調査報告書第8集

高島忠平・七田忠昭編 1979『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第47集

高倉洋彰 1972「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』58-3

高倉洋彰 1976「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2

高倉洋彰 1985「弥生時代小形仿製鏡について（承前）」『考古学雑誌』70-3

高倉洋彰 1987「割られた鏡」『MUSEUM KYUSYU』21

高倉洋彰 1989「銅鏡」『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集

高橋徹 1979「廃棄された鏡片—豊後における弥生時代の終焉—」『古文化談叢』6

高橋徹 1989「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学』60

高橋徹 1989「弥生墳墓と副葬品」『考古学ジャーナル』308 ニューサイエンス社

高橋敏 2005「鏡片分布から見た古墳出現期の動態」『馬洗場B遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第123集

竹井治雄編「愛宕神社古墳」『京都府遺跡調査概報』83 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

武末純一 1990「墓の青銅器、マツリの青銅器—弥生時代九州例の形式化—」『古文化談叢』22

田崎博之 1984「北部九州における弥生時代終末前後の鏡について」『史淵』121

田崎博之 2006「四国・瀬戸内における弥生集落—愛媛県文京遺跡の密集型大規模集落、北部九州との比較—」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』

田尻義了 2001「弥生時代青銅器生産における生産体制論」『九州考古学』76

田尻義了 2003「弥生時代小形仿製鏡の製作地—初期小形仿製鏡の検討—」『青丘学術論集』22

田尻義了 2004「弥生時代小形仿製鏡の生産体制論」『日本考古学』18

田尻義了 2005「近畿における弥生時代小形仿製鏡の生産」『東アジアと日本—交流と変容』2 九州大学

立岩遺蹟調査委員会編 1977『立岩遺蹟』

辻田淳一郎 2001「古墳時代開始期における中国鏡流通形態とその画期」『古文化談叢』46

辻田淳一郎 2005a「破鏡の伝世と副葬—穿孔事例の観察から—」『史淵』142

辻田淳一郎 2005b「破鏡と完形鏡」『東アジアにおける鏡祭祀の源流とその展開』國學院大學21世紀COEプログラム 考古学・神道シンポジウム予稿集

辻田淳一郎 2006「威信財システムの成2・変容とアイデンティティ」『東アジア古代国家論』すいれん舎

出越茂和編 1984『金沢市額谷ドウシンダ遺跡 金市無量寺B遺跡Ⅱ』金沢市文化財紀要第44集

- 出原恵三他編 1986『田村遺跡』高知県教育委員会
出原恵三 2004『青銅器』『西分増井遺跡Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
寺沢薫 1985「弥生時代舶載製品の東方流入」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ
鳥取県教育委員会 1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
中村豊編 2005『庄（庄・蔵本）遺跡』
長嶺正秀編 1987『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集
奈良県立橿原考古学研究所編 2001『ホケノ山古墳調査概報』学生社
西川寿勝 1995「弥生時代終末の対外交流—破鏡の終焉をめぐる一」『研究紀要』3（財）大阪府埋蔵文化財協会
西田巖編 2000『増田遺跡Ⅳ』佐賀市文化財調査報告書第111集
野島永 2005「初期前方後円墳と鉄刀」『季刊考古学』90 雄山閣出版
橋本澄夫編 1976「古府クルビ遺跡」『北陸自動車道関係文化財調査報告書Ⅱ』石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団・石川県教育委員会
濱石哲也 1991「福岡市早良区藤崎遺跡出土の小形仿製鏡」『福岡考古』15
林正憲 2005「小形倭鏡の系譜と社会的意義」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』
平尾和久 2006「引き継がれる銅鏡祭祀」『大鏡が映した世界』伊都国歴史博物館図録3
広島県教育委員会 1981『石鎚山古墳群』
藤丸詔八郎 1993「破鏡の出現に関する一考察—北部九州を中心に—」『古文化談叢』30（上）
福岡市教育委員会 2000『花野谷1号墳発掘調査概報』
福島日出海編 1987『嘉穂地区遺跡群Ⅳ』嘉穂町文化財調査報告書第7集
福島正美編 1984『吉崎・次場遺跡』
本田岳秋編 1998『良積遺跡Ⅱ』北野町文化財調査報告書第11集
正岡睦夫 1973「愛媛県今治市近見相の谷9号墓」『古代学研究』67
松本哲他編 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』大山町埋蔵文化財調査報告書第17集
溝口孝司 2000「墓地と埋葬行為の変遷—古墳時代の開始の社会的背景の理解のために—」『古墳時代像を見なおす』青木書店
宮本一夫編 1991『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
森浩一 1972「滝ヶ峯遺跡予備調査の記録」『滝ヶ峯遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会
森貞次郎 1985「弥生時代の東アジアと日本」『稲と青銅と鉄』日本書籍
森岡秀人 1993「近畿における鏡の受容」『季刊考古学』43 雄山閣出版
森岡秀人 1994「鏡片の東伝と弥生時代の終焉」『倭人と鏡—日本出土銅鏡の諸問題—』第35回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
森岡秀人 2005「銅鏡研究の動向と庄内式前後の日本列島事情（上）」『考古学論集』6
森岡秀人 2006「三世紀の鏡—ツクシとヤマト—」『邪馬台国時代のツクシとヤマト』学生社
柳田康雄編 1985『三雲遺跡 南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集
柳田康雄 2000「平原1号墓」『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集
柳田康雄 2002「踏返し鏡と摩滅鏡」『九州歴史資料館研究論集』27
柳田康雄 2005「多鈕鏡と漢式鏡の祭祀」『日本列島における祭祀の淵源を求めて』國學院大學21世紀COEプログラム 国際シンポジウム
柳田康雄・小池史哲編 1982『三雲遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第63集
山口譲治・吉留秀敏・渡辺芳郎編 1989『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集
山野洋一編 1982『阿志岐古墳群』筑紫野市文化財調査報告書第7集
山本三郎 1990『播磨大中遺跡の研究』
吉田広 2006「四国・瀬戸内地域の集落出土青銅器」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』
米倉秀紀編 2001『羽根戸南古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集
渡部明夫編 1983『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市教育委員会

【図の出典】
第1図 西田編2000を改変
第2図 伊都国歴史博物館2006を改変
第3図 江崎・檜崎編2006を改変
第4・5図 筆者作成